暮らしの学び舎 Salmatt 企画第 2 回カタリバ「家庭科の今，私の課題」アンケート結果の概要

【第 2 回の感想，ご意見】

1．「会の価値」と今後の期待

・唯一無二の対話の場　小・中・高・大学（教員養成）や育休中、海外事情を知る人など、これだけ多様な視点から「家庭科観」をぶつけ合える機会は他にない。

・「共感」から「一歩先」の議論へ「抽象的な問いに終始してその場で盛り上がって終わる」のではなく、次回は出た問いに対する「家庭科の回答（仮）」を誰かが具体化して提示し、さらに深い（異なる次元の）議論へ発展させてほしいという、非常に本質的かつ建設的な提案があった。

2. カリキュラム・題材構成への課題と意欲

・教科書ベースからの脱却　時間制限や教員間の調整の難しさから「内容（単元）ごと」の授業になりがちだが、子どもの実態に合わせた「題材」ベースのカリキュラムを作りたいという強い思い。

・育休中のリスタート　現場から離れて情報が不足しがちな時期に刺激を受け、「時間のある今、もう一度カリキュラム作りに挑戦したい」という頼もしい意見。

・時数減少への危機感　中学校で技術と分離した際の時間数（30 時間前後）の厳しさを見据え、題材と年間計画の深い理解が不可欠であるという指摘。

3. 「家庭科の本質」についての深い洞察

―家庭科が育むべき力や、他教科とのバランスについて―

・「生活の主人公」を育てる： 指導要領で領域が細分化されても、本質は生活を多角的・総合的に捉えること。「人、もの、自然、情報とのつながり軸」で「互恵的で自分らしい生活」を創造する力を育てるべきだという意見。

・全学年・生活に根ざす視点： 小学校 5・6 年だけでなく、他の全学年の生活にも家庭科の視点が関わっているという気づき。

・「家庭科としての探究」の確立： 昨今の授業が「探究課題の解決」に寄りすぎて何教科か分からなくなっている現状に共感しつつ、家庭科の土台をしっかりと持った上での探究を目指す必要性が語られた。また、「家庭科の授業（題材計画含む）ができれば、どの教科でもいい授業ができる」という強い確信も示された。

4. 教員養成（大学）におけるアプローチ　次世代を育てる立場から

・家庭科応援団の育成

　他教科を専門とする学生に対して「家庭科を学ぶ意味・意義」「生活を科学することの重要性」を伝えることで、将来現場に出たときに「他教科から家庭科をサポートしてくれる応援団」になってほしいという願い。

【今後取り上げて欲しいテーマや企画】

１．家庭科の独自性

・総合との違い

総合的な学習の時間も「正解のない問い」を扱いますが、家庭科は「生活の科学・実践」という明確な土台（衣食住、家族、消費など）を持っている。

・道徳との違い

道徳が「心の本質や価値観」にアプローチするのに対し、家庭科はそれを「実際の生活行動や環境への働きかけ」として具現化・実践する力を育てる。

・独自性

知識を得るだけでなく、学んだことを「今日からの自分の生活」に直接還元できる（＝生活の主人公になる）点にある。

2. 多様な家庭環境における「リアルな題材設定」

・家庭の形や経済状況、価値観が多様化する中で、「全員に自分ごと化してもらう」ことの難しさ。

・特定の「理想的な家庭像」を前提としない、普遍的かつ現代的なテーマ（例：持続可能な消費、時間マネジメント、ケアのあり方など）の模索。生徒個々のバックグラウンドを傷つけず、かつ思考を深められるような「教材の抽象度と具体性のバランス」をどう取るか。

3. 高校家庭科の時間数を増やすためのアプローチ

・中学校同様、高校でも他教科との兼ね合いでコマ数の確保が課題となっている。

・単に「時間を増やしてほしい」と叫ぶだけでなく、家庭科が「これからの社会（情報、金融、サステナビリティなど）を生き抜くためにいかに必須の教科であるか」を、学校現場や社会へどうアピール（エビデンスを提示）していくか。

4. 「評価・評定」の壁（誰のための評価か？）

・「子どもの未来のためではなく、評価（成績付け）のために評価を行っているのではないか」という、多くの教員が抱く最大のジレンマ

・「自立した生活者」という数値化しにくいゴールを、ペーパーテストやルーブリックでどう見取るか。生徒自身が自分の変容に気づき、次の生活に活かせるような「見方・考え方の成長を促すポートフォリオや自己評価」の具体的な実践例の共有。